漢詩の世界

■そのこころと味わい

石川忠久著

大修館書店

漢詩の世界

そのこころと味わい

石川忠久著

大修館書店

石川忠久（いしかわただひさ）

東京都出身．1955年東京大学文学部中国文学科卒業．同大学院修了．桜美林大学教授．東京大学講師．ＮＨＫ通信高校講座「漢文」講師．著書『世界の詩・中国』（さ・え・ら書房）『陸游詩集』（角川書店）『中国文化叢書・文学概論』（共著・大修館書店）『資治通鑑選』（共著・平凡社）『中国文学史』（共著・東京大学出版会）『漢詩の風景』（大修館書店）等。

漢詩の世界

——そのこころと味わい——

昭和五十年三月十日　初版発行
昭和五十一年十月十日　五版発行

著者　石川忠久
発行者　鈴木敏夫

発行所　株式会社　大修館書店
東京都千代田区神田錦町三ノ二四
電話（二九四）二二二一（大代表）
振替口座　東京　九-四〇五〇四番

印刷／壮光舎　製本／大成社

© T・ISHIKAWA 1975
¥900
お茶の水図書館

はしがき

十年ほど前から、テレビやラジオで漢詩の解説をするようになり、その縁で、多くの視聴者のかたから直接問い合せをいただいたり、また詩の講演などをしたことも少なくありません。古典教育が昔ほどではない昨今でも、漢詩に対する興味と関心は、依然として根強いものがあるようです。ことに、詩吟界や、書道、茶道など、漢詩に密接な関連をもつ分野は、むしろ昔以上の盛況を呈しているともいえましょう。古典に郷愁をいだく年輩者ばかりでなく、若い人にも漢詩の愛好者がふえているのは、喜ばしいことです。

ただ、何といっても漢詩はとっつきにくいところがあるため、そのおもしろみ、深い味わいなど、十分に尽すことは、言うほど簡単なことではありません。外見の固さのために入り口を狭くしているところがある、といえましょう。世界最高の詩歌である漢詩の味わいを尽さず、うわ面だけをなでて通るとしたら、いかにも残念なことです。

その固さを釈(と)きほぐすために、この書では思い切って、話す調子で、平易に書くことを試みました。原詩があって、語釈があって、通釈があって、という従来の参考書のスタイルを避けたのです。語釈

も通釈もだいじですが、それをみなくだいて中に入れこみ、詩の心を汲むことを主眼にしました。図版もたくさん入れて楽しい読み物にしたつもりです。

漢詩の数は膨大ですから、そのどれを選ぶかが大問題になります。本書では、まず日本人にもっとも愛誦されているものから、選びました。詩吟などでよく吟じられている詩が、詩としてはどんな味わいがあるのか、再認識してみるのもだいじなことと思います。それで、和漢の名詩を九つのジャンルに分けて、それぞれのみどころを見てゆくこととしました。とりあげた詩は、全部で六〇首ほどですが、絶句・律詩・古詩の形式すべてが紹介できるように、いろいろバランスをとり、前篇の漢詩の流れ、漢詩の仕組み、と合せて、まずは、小さいながら漢詩の世界を構成したつもりです。

どうぞ、どこからでも気軽に読んでください。この書によって、さらに漢詩への興味を増し、深く進んでいかれるなら、これに過ぐる喜びはありません。

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

漢詩の世界／目　次

はしがき……1

I　漢詩の流れ　1

詩経／楚辞／五言詩の発展／
謝霊運と陶淵明／近体詩の起り／唐詩／
遣唐使の時代／宋以後の受容――現代まで

II　漢詩の仕組み　27

1　漢詩の型式……28
2　近体詩の型……29
3　近体詩の声律……31
平仄／一句の中の切れ方／脚韻
4　近体詩の構成法……34
絶句の起承転結／律詩の構成／対句
5　古　詩……39

III　漢詩の味わい　43

一　自適　45

春暁／孟浩然……46

○山中　幽人と対酌す／李白……48

鹿柴／王維……51

胡隠君を尋ぬ／高啓……54

香炉峰下、新たに山居を卜し、草堂初めて成り、偶たま東壁に題す／白居易……56

無題／夏目漱石……60

二　自然　63

山行／杜牧……64

江南の春／杜牧……68

○廬山の瀑布を望む／李白……72

翠岑を下る／良寛……74

花朝澱江を下る／藤井竹外……76

三　旅情　79

峨眉山月の歌／李白……80
早に白帝城を発す／李白……82
絶句／杜甫……86
楓橋夜泊／張継……89
夜　墨水を下る／服部南郭……92
天草洋に泊す／頼山陽……94
赤馬が関を過ぐ／伊形霊雨……98

四　送別　101

元二の安西に使するを送る／王維……102
友人を送る／李白……104
黄鶴楼にて孟浩然の広陵に之くを送る／李白……107
芙蓉楼にて辛漸を送る／王昌齢……109
人の長崎に帰るを送る／竹添井井……113

五　人生　115

貧交行／杜甫……116
酒に対す／白居易……118
偶成／朱熹……119
半夜／良寛……121
冬夜読書／菅茶山……123
桂林荘雑詠　諸生に示す／広瀬淡窓……125
将に東遊せんとし壁に題す／釈月性……128

六　感傷　131

静夜思／李白……132
春望／杜甫……133
江南にて李亀年に逢う／杜甫……137
除夜の作／高適……139
九月十日／菅原道真……141
門を出でず／菅原道真……143

七　征戍　147

涼州詞／王之渙……148
涼州詞／王翰……151
磧中の作／岑参……154
九月十三夜／上杉謙信……156
金州城下の作／乃木希典……158

八　歴史　161

〇越中覧古／李白……162
金陵の図／韋荘……165
烏衣巷／劉禹錫……167
不識庵　機山を撃つの図に題す／頼山陽……170
常盤孤を抱くの図に題す／梁川星巌……172
芳野／藤井竹外……174
応制　三山を賦す／絶海中津……178

九　諷刺　181

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.c

(6) 兵車行／杜甫……182
売炭翁／白居易……190
あとがき……196

I 漢詩の流れ

山水図　李唐筆

漢詩の流れ

中国の詩は、三千年の歴史をもちます。しかもそれは、あたかも川の流れのように、絶え間なくうたいつがれてきました。詩は、中国文学のもっとも重要な分野を占めるばかりでなく、世界文学の中においても、その質・量の大いさは、ほかに類がありません。

我が国は、この巨大な文学に、三千年の歴史の中ほど過ぎから接し、初めは少しずつ模倣し、やがてはわがものとして受容してきました。我が国の文学は、直接・間接にはかりしれないその影響を受けたのです。

考えてみれば、外国の、高級な文学を、わがものとして作ったり、味わったりするというのは、たいへんなことです。英語やフランス語がしゃべれたり読めたりする人はたくさんいても、詩を作る人はほとんどいません。これを見ても、日本における漢詩のもつ重い意味がおわかりでしょう。

先祖の懸命な努力のおかげで、いまわれわれは漢詩を自然に受け入れることができます。しあわせといわずして何でしょう。もっともっと漢詩を読み、味わってゆくようにしたいものです。その基礎として、まず初めに漢詩の流れと受容のさまを見ておくこととします。

詩経　漢詩の源をなすものが、『詩経』です。西暦紀元前一二世紀から、紀元前六世紀まで、つまり周の初めから春秋の末までの六百年間に、黄河流域の諸国でうたわれた歌です。

中国の文明は、黄河の流域から起りました。三千五百年ぐらい前に文学が作り出され、しだいに文明が周辺に及んでゆきました。歌は古代社会の中心的行事である祭りとともに発展し、やがて整理され、『詩経』となったものでしょう。今日、三〇五篇の詩が伝わっていますが、編纂の当時から「詩三百」といわれていますので、ほぼそのままの姿で、二千五百年伝えられたことがわかります。

『詩経』は、内容から、風・雅・頌の三つに分けられます。風とは国風で、「くにぶり」をうたうものです。一五の国に分かれるので、十五国風といいます。今の陝西省から山東省にかけての、黄河の流れに沿った国々の歌で、一六〇篇を占めます。『詩経』の中でもっとも重要な部分です。

雅も、民衆の歌声に基づくものが多いが、朝廷に取り入れられて整えられ、宴会や賓客の送迎などにうたわれたものです。小雅と大雅に分かれ、全部で一〇五篇あります。大雅の中には、周の建国の伝説をうたった長篇の詩もあります。

頌は、周頌・魯頌・商頌の三つに分かれ、先祖の祭りのとき演奏されたもので、舞をともなったようです。全部で四〇篇あります。

『詩経』の特色は、第一に四言詩ということです。一句が四字からなり、四句で一章をなし、三章で一篇をなす、というのが、典型的な形式です。むろん、字余りもあれば、何章にもわたる長いものもありますが、四言で、単純なくり返しの、素朴な歌、というのが、『詩経』の一大特色です。すべ

て読み人知らずで、古代社会の民衆の哀歓が穏やかなうたいぶりでうたわれているのです。だいたい、黄河の流域は、殺風景な黄土の広がる地帯で、気候も厳しく、人々は大地にしっかり足をふみしめて生きていましたから、いきおい、その詩の調子も地味で、現実的になります。

では一篇を見てみましょう。この詩は一章が八句です。

碩鼠　　碩鼠（魏風）

碩鼠碩鼠　　碩鼠　碩鼠
無食我黍　　我が黍を食う無かれ
三歳貫女　　三歳　女に貫うれども
莫我肯顧　　我を肯て顧る莫し
逝将去女　　逝に将に女を去り
適彼楽土　　彼の楽土に適かんとす
楽土楽土　　楽土　楽土
爰得我所　　爰に我が所を得ん　（以下、ほぼくり返し）

碩鼠とは大ねずみのことです。この大ねずみが何を意味するか、もういわないでもわかるでしょう。魏という国は、貧しい国です。貧しい土地にしがみついて、生きてゆく人々、その上に、容赦なく税を取りたてる王。その苦しい生活の中から、人々は、やんわりと、しかしその内には痛烈な諷刺

をこめてうたいます。こんな土地は捨てて、楽しい所へ行こう、と。
それにしても、こんなに古い歌がよく整理され、そのままずっと伝えられたものです。今日では、古代文学の研究が進み、従来施されてきた解釈とは違う、新たな解釈も行われ、貴重な民俗資料としても見直されています。
なお、『詩経』につけられた「序」が、我が国の『古今集』の序に取り入れられ、詩文学の理論の基本にすえられていることをつけ加えておきます。

楚辞　中国の南半分を貫く大河、長江（揚子江というのは外国人が呼んだ名）の流域は、太古はジャングルだったと思われますが、ここに、春秋から戦国にかけて楚の国が栄えました。この地方の民間歌謡が『詩経』の刺激を受け、屈原という天才詩人の出現によって整えられ、『楚辞』となりました。
屈原は楚の王族の出身、初めは王に信任されましたが、才をねたむ大臣に讒言され、洞庭湖のほとりをさまよい、ついには身投げをして死ぬという生涯でした。その間、身の不遇を嘆き、国の運命を悲しんで、「離騒」を作りました。これは屈原の自伝的長篇叙事詩です。ことに注目されるのは、作者が途中天上世界を駆けめぐり、神と交遊することです。『詩経』には全く見られなかった詩の世界といえましょう。『詩経』では、人は現実の世界を見つめてうたいました。北と南の風土や習俗の違いによる詩風の違いと思われます。長江一帯は、高い山、大きな沼地、湖があり、それをとりまく気象条件も複雑な変化をします。その環境の中から、幻想的な詩歌がうたわれるようになったのでしょ

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.c